

鈴木寛 社会の機能 としての スポーツ。

スポーツは、人間の生活に必要不可欠なものではない。未来永劫、「衣食住」以上の存在にはなれないだろう。しかし、世の中に存在した方が良いというのも事実である。スポーツは人間の精神的成長や協調性を育み、感動や興奮や悔恨や絶望や喜び……ありとあらゆる感情を内包する。「人間のふれあい」が希薄化した現代にあつては、確実に「世の中に必要な機能」と化しているのである。スポーツをこよなく愛する政治家・鈴木寛が、政治という仕事の現場の日常から感じ取った「スポーツの存在意義」を綴る。

第六回 スポーツ振興法の改正と マスメディアの責任。

荒井直子 編集
Composition by Naoko Arai

「スポーツ振興法」を改正する理由。

「スポーツ振興法」という法律をご存知だろうか。現在、日本において実施されるスポーツ政策は、一九六一年に定められたこの法に基づいて行われている。東京五輪の前に作られたという背景もあり、事実上、アマチュアスポーツを前提にしているのも特徴だ。

その法律が制定されて今年六月で九十七年。その間に、日本のスポーツ界では、企業スポーツが衰退。プロスポーツや総合型地域スポーツクラブの存在感が増すなど、スポーツを取り巻く環境は大きく変化した。さらに、少子化、子供の体力低下やスポーツ離れなど、将来的な課題も指摘されている。

こうした時代の移り変わりとともに、いよいよ現状

とスポーツ振興法の間を生じたズレを無視できない状態になっている。実際、私がJリーグ発足に関わった当時でさえも、サッカースタジアム建設に関する補助金問題で大変苦労した経験がある。Jリーグはプロリーグであるため、現行のスポーツ振興法ではいろいろな制約が生じてしまうのだ。こうしたズレはスポーツの未来を考えたとき非常に大きな問題となりかねない。実は今、超党派の国会議員たちによってスポーツ振興法改正の議論が行われている。トップアスリートを育て、支える土壌、そして老若男女の誰もがスポーツを楽しむ機会・環境を整えるために国はどうすべきなのか等々を、話し合っているのだ。

議論のポイントになるのは「学校スポーツ」だ。ここ数年、子供たちの体力低下が指摘されるようになって久しい。かつてと生活環境が大きく変化。子供たちが外で遊ぶ機会が減少しているのも体力低下の理由だろう。だからこそ、学校スポーツが基礎体力養成のために担う役割、期待はおのずと大きくなっている。

学校スポーツには「体育の授業」と「クラブ活動」の二つの柱が挙げられるが、「クラブ活動」は特に難しい局面にあると感じている。要因のひとつが急速に進む少子化だ。子供が減るということは、チームスポーツのクラブが成立しないということ。私が中学生の頃は、どの学校にもバレーボール部、バスケットボール部、野球部、サッカー部、陸上部などのメジャー競技のクラブは必ず存在した。しかしながら、多くの学校で野球部があるところはサッカー部がない、またはその逆、ましてやラグビー部なんて作れないということが、現実的な問題として起こっている。

さらにもうひとつの問題が、部活の顧問となる教師の確保難と高齢化だ。特に中学校で指導者を確保することは難しい。

こうした学校スポーツに対して重要な役割を果たすのが「総合型地域スポーツクラブ」だろう。これは、国が推進しているスポーツ振興政策のひとつ。幅広い年代、運動レベルの地域住民が集まって多様な競技を楽しむ新しい「場」である。企業や国、学校に頼らないスポーツの場として、ここ一〇年で急速に浸透してきた。私も平尾誠二さんと一緒にNPO法人SCIX（スポーツ・コミュニケーション・インテリジェンス機構）を立ち上げたが、これもその一例だ。

しかし、学校体育と地域スポーツクラブの連携がうまくとれているかといえば、そうとは言い難い。

たとえば、現在の高校スポーツ（一般的な高校生の年齢に相当するスポーツ・カテゴリー）で、学校の部活動のチームと地域スポーツクラブのチームが同じ大